

氏 名 篠 原 守 信

授 与 学 位 医 学 博 士

学位授与年月日 昭和 40 年 3 月 5 日

学位授与の根拠法規 学位規則第 5 条第 2 項

最 終 学 歴 昭和 31 年 3 月 県立福島医科大学卒業

学 位 論 文 題 目 子宮頸癌発生母地の研究

論文審査委員 東北大学教授 赤 崎 兼 義

東北大学教授 九 嶋 勝 司

東北大学教授 諏 訪 紀 夫

論文内容要旨

子宮頸癌発生母地の研究

子宮頸癌に関する病理組織学的研究の報告は枚挙にいとまがない。殊に病変が可視部にあるという位置的な有利性もあり、その発生初期像に関する研究は他臓器の場合に比較すると甚だ多い。然しながら、その組織発生に関しては、今尚 膈部の扁平上皮由来を主張するもの、頸管の円柱上皮由来を信ずるもの、さては予備細胞由来を説くものと今日尙諸説紛々としており、定説を見るに至っていない。

著者は子宮頸癌発生母地の背景をたゞし、更に発生母細胞を明らかにする目的で、肉眼的に頸癌の発生を認め得なかつた30才以上の無選択剖検子宮178例、手術剔出子宮36例及び円錐切除された子宮頸癌部16個について、一部連続切片により必要と思われるものについては特殊染色法を行い、詳細な病理組織学的検索を試み、次の様な成績を得た。

1) 無選択剖検子宮178例を組織学的に検索した結果、2例の上皮内癌を認めたが浸潤性子宮頸癌は見出せなかつた。前者上皮内癌発見頻度は全検索例の1.2%に当る。その他4例の良性異型上皮増殖を認めたが、これは全検索例の2.4%に相当する。これら病変の発見頻度は既往に報告された諸家の成績と大略一致している。

2) 子宮頸癌の発生母組織として一部の学者により問題にされている予備細胞増殖の発現頻度を検討してみると、前記無選択剖検子宮例では66.7%にその増殖を認めた。特に年齢別には30才代78.6%、40才代75.4%と多いが、50才代65.3%、60才代54.8%と減少している。増殖の程度については30才代では一層性のもが多く、40才代、50才代では多層性のもが多くなる傾向にあつた。このことは、30才代に多く、40才代、50才代で減少する膈部びらんの治癒に本細胞が主役を演ずるといふ最近の学説を裏がきしているように見える。然るにほとんど同じ年齢層に見られた上皮内癌13例及び初期浸潤癌16例における予備細胞増殖の頻度は58.6%に過ぎず、従つて本細胞が頸癌細胞の母地であるという説には積極的な賛意を表することが出来ない。

3) 子宮頸癌細胞の発生由来を明らかにする手段として、上皮内癌及び初期浸潤癌の占居部位を糺したところ、全症例29例中円柱上皮領域に位置するものは上皮内癌の7例、初期浸潤癌の5例計12例に見られたのに対し、扁平上皮領域に限局する症例は1例もなかつた。更に両方の領域に拡がっている症例の全ては円柱上皮領域に偏在する傾向を示した。尙最も強い浸潤部に於ける深さが5mm

mを越えた浸潤癌の8例についての占居部位の検索では6例までが両域に拡がっているという所見を得た。

4) 上皮内癌及び初期浸潤癌の母細胞を検討する目的で、これらの病巣に隣接する上皮細胞の観察を行った結果、病巣は正常の円柱上皮乃至扁平上皮に直接するものが大部分であるという成績を得た。又病巣周囲がすべて円柱上皮に取りかこまれている5例を得たが、正常扁平上皮に取りかこまれているものは1例もなかつた。

5) これら3)及び4)の所見は頸癌の発生母地が頸管円柱上皮由来であるという説に有利な成績である。

6) 上皮内癌及び初期浸潤癌の病巣が異形成上皮に隣接している症例を7例認めたと、良性異型上皮と隣接するものは1例もなかつた。従つて異形成上皮から良性異型上皮を経て癌細胞へ移行するという説には賛成出来ない。

7) 頸管腺充填像は上皮内癌及び初期浸潤癌の計29例中26例に認められたが、頸管腺形成部に癌病巣が認められ、表層被覆部にこれを認めない症例は得られなかつた。これに反し、初期浸潤癌の16例の検索では表層被覆部にのみ癌巣を認め、腺管形成部には腺充填像を認めなかつた例が3例あつた。この事実から頸癌が頸管腺域の表層被覆上皮から発生する可能性があることを示している。

以上著者は子宮頸癌が頸管円柱上皮を発生母地とする説に有利な成績を得たが、最近問題になつている予備細胞増殖による異形成病変が癌に移行するという説に対しては否定的な成績を得た。更に頸管円柱上皮の中で頸管被覆上皮から頸癌の発生したと考えられる症例を得たが、腺形成部より発生したと考えられる症例には接し得なかつた。

番 査 結 果 の 要 旨

著者の研究は日本人女子の重要な顧慮であり乍ら今日尙異論の多い子宮頸癌の組織発生を究明する目的で行われたものである。

研究実施の方法として著者は先ず30才以上の非癌前検子宮178個につき、微小癌ないし上皮内癌の有無と最近頸癌発生母地として問題にされて来た予備細胞の動態をしらべ、他方初期浸潤癌16例及び上皮内癌13例の発生を見た子宮頸部につき、同様に予備細胞増殖の検索を施行した。更に著者は頸癌発生母細胞を明らかにする目的で、浸潤癌及び上皮内癌病巣に隣接する細胞の詳細な病理組織学的検索をも行っている。

著者の成績を要約すると肉眼的に癌腫を認めなかつた剖検例の子宮腔部では初期浸潤癌は1例も見出せなかつたが、上皮内癌の2例及び異型増殖上皮巢の4例を認めた。これらの症例中予備細胞増殖を見たものは66.7%にだけつた。然るに上皮内癌及び初期浸潤癌発生子宮についての細胞増殖は僅かに58.6%で、前者の数字より少なかつた。又上皮内癌及び初期浸潤癌29例中予備細胞増殖による異形成上皮と病巣の隣接する7例を認めたが、異型上皮との隣接は1例にも認めていないことから、著者は予備細胞が異形成上皮から異型上皮を経て癌細胞化するとの説は概に承認出来ないとしている。

次に著者は扁平、円柱上皮の境界を第二次境界とし、頸管腺の認められる最外端を第一次境界とよぶ、一般の見解にならい、子宮腔頸部を区分し、癌病巣の占居部位を検索している。その結果を見ると、上皮内癌13例中7例及び初期癌16例中5例は円柱上皮領域に限局することを確めたがそれ以外の症例は扁平上皮及び円柱上皮の両領域に拡がっており、扁平上皮領域のみに病巣をみたものは1例もなかつた。尙最も強い浸潤部位における癌細胞浸潤の深さが5mmを越えた浸潤癌8例の検索ではすべての例が両方の領域にわたる拡がりを示した。

更に上皮内癌13例、初期癌16例についての病巣周囲における隣接上皮の検索を行った結果腔部では正常扁平上皮に隣接し、頸管部は正常円柱上皮と隣接するものが多く、それぞれ6例及び7例を数えた。又病巣周囲が全て正常円柱上皮によつて囲まれているものとして初期浸潤癌の3例、上皮内癌の2例を認めたが、そのうち全て正常扁平上皮によつて囲まれているものは1例もなかつた。その他病巣に隣接して良性異型上皮や基底細胞増殖を認めた例もなかつた。頸管腺充填像は上皮内癌及び初期浸潤癌の計29例中26例に認められ、そのうち初期浸潤癌の3例では表層被覆部のみに癌細胞を見出したが、頸管腺形成部に癌腫を認めないものもあつた。

以上著者の研究成績は、子宮頸癌が頸管円柱上皮を発母地の主体とするとの成績であつたが、予備細胞増殖による異形成病変が癌に移行すると云う説に賛成のデータは全く得られていない。

よつて、本論文は学位授与に値するものと認める。